19.「再生」

YUKIは、逆境に強い。そんな印象を持っているスタッフは多い。

確かにそれは彼女も否めない。好むと好まざるにかかわらず、なぜかそういう局面に気がつくと立たされている。

しかもそこで、持っている力を倍にして発揮したりする。

飽きっぽいが集中力は並はずれてすごい。持続力には自信はないが、根気と呼べる種類の力なら、かつてバレー部で鍛えられた。ついでに言えば、悔しさをバネにする性質も中学時代に形成されたものだ。

(でも、さすがにこんなんばっかりで疲れるよー。もうちょっとこう緩やかにいきたいもんだなあ)

ひとりで動くということ、それをやりきることがこんなにもハードだったとは……。毎日が判断の連続、踏ん張りどころだらけである。「ユズ、本当にこれで大丈夫かな。なんとか進んでるのかな?　ホントにこれでイケてるんかな~?」

仕事場から自宅へ帰る車の中、YUKIは毎日のようにマネージャーの柚上に尋ねた。

「大丈夫ですよ、YUKIちゃん。進んでますよ」

「そっかなあ。……はあー……」

確信を持ってやっていることなのに、不安はいつもついてまわる。

自分の好き勝手で始めたことなのだ、絶対にそこから逃げられない。

JUDY AND MARYにも責任は持っているが、ひとりでやるとなるとその種類は当然変わってくる。歌えない、もうロンドンから帰りたい、JUDY AND MARYではそれでもなんとか物語は進んできたが、NiNaやchara+yukiではそうはいかない。

尊敬しているチャラと一緒に仕事ができることは、YUKIにとって喜びだったけれど、それだけに実はとても緊張していた。

チャラが持っていたデモ・テープをもとにふたりで「愛の火★３つ★オレンジ」のメロディを詰めていくとき、ケイトとの場合がそうであったように、チャラもまたYUKIが提案したアイデアを面白がってくれた。同じ速さで閃きを拾い合い、同じ深さで解釈し合える関係を、いつでも用意してくれているチャラの姿勢が、作曲らしい作曲の経験のなかったYUKIにはうれしかった。

「YUKIは無理しない範囲でいいからねえ」

まあまあ、そう慌てずに、楽しくやろうよ、そんなムードがチャラの周囲にはいつもある。予定した時間のなかで、きっちり気持ちよく仕事が進む。それでいて作業の一つひとつはとても丁寧だ。

(チャラさんの仕事の仕方って、当たり前だけど、あたしと違う。ケイトもそうだ。いろんな仕事の仕方があるんだなあ)

年齢やキャリアは違えども、同じ仕事に就いている者であれば、ひとつの仕事を通して、その人の生き方まで見ることができる。

ボーカリストとして、ひとりの女性として、ケイトやチャラからYUKIはいろんなことを学ばせてもらった。

何より、彼女たちのいちファンとして、音楽することを楽しんだ。

NiNaやchara+yukiでYUKIが歌を作ったり歌ったりすることが、JUDY AND MARYにどんな影響を及ぼすのかあなたは考えていない、と苦言を呈する人もいた。つまりは、本体が休んでいるのにどうしてひとりで歌っているんだ?　ということだろう。

YUKIはただ歌っていたかった、それだけなのである。

(JUDY AND MARYの活動が休みに入っても、ずっと歌っていよう)

1999年の年頭に <今年やりたいこと>　を挙げていったときから、そう決めていた。そして、それは、間違いではなかった。

「曲が出来たんだけど、そろそろジュディマリ、やらない?」

夏の終わり、JUDY AND MARY再始動のきっかけを運んできたのはTAKUYAだった。もしもTAKUYAのような人間がいなければ、JUDY AND MARYはまだもう少し、休んでいたかもしれないとさえYUKIは思う。考えてみればこのバンドには、能動的に物事を動かそうとする人間は、彼しかいない気がするからだ。

昨年の９月、麻布のスタジオで「帰れない２人」を録って、あれから１年。再び４人集まり、JUDY AND MARYの新しい歌である「Brand New Wave Upper Ground」を歌ったとき、YUKIは自分でも会心の歌を録れたと思った。

喉が再生していく間に、ケイトに出会い、音程のとり方や自分の癖を徹底的に見直した。

モデル・チェンジした自分の歌が、YUKIは大好きだった。

そして、JUDY AND MARYというバンドと、自分との関係も。

JUDY AND MARYは、メンバー一人ひとりのもので、たとえば人としてのタイプが４人それぞれ違うように、バンドへの思いの寄せ方も、４人それぞれに異なっている。

それがいいと、今、YUKIは思っている。

(JUDY AND MARYは今のあたしを作ったバンドだ)

1992年からずっと自分の内で生き続けているこのバンドが、YUKIをつき動かし、あるときには激しく揺さぶり、どこへでも行けるような柔軟な心と力を与えてくれた。

生き物のようなこのバンドに内包されるでもなく、それに抗うでもなく、JUDY AND MARYは、今、普通にYUKIのなかに在る。